

高崎経済大学論集

THE ECONOMIC JOURNAL OF
TAKASAKI CITY UNIVERSITY OF ECONOMICS

第44巻 第3号

平成13年12月

高崎経済大学経済学会

学 会 役 員
会長 小 池 重 喜
理事 今 井 雅 和
◎理事 高 松 正 毅
理事 富 澤 一 弘
理事 藤 野 寛
監事 中 村 彰 良
監事 八 木 明 道
◎印は本号編集責任者

高 崎 経 済 大 学 論 集 第44巻 第3号 (通巻154号)

平成13年12月20日 印刷

平成13年12月27日 発行

編 集 兼 高 崎 経 済 大 学 経 済 学 会
発 行 人 会 長 小 池 重 喜

発 行 所 高 崎 経 済 大 学 経 済 学 会
〒370-0801 高 崎 市 上 並 榎 町 1300
TEL 027-344-6266
FAX 027-344-5857
<http://www.tcue.ac.jp/gakkai/>
E-mail:k-gakkai@tcue.ac.jp

印 刷 者 野 島 印 刷 株 式 会 社
〒370-0861 高 崎 市 八 千 代 町 4-8-14

本号執筆者（執筆順）

飯岡秀夫	本学経済学部教授
小池重喜	本学経済学部教授
茂木一之	本学経済学部教授
加藤一郎	本学経済学部教授
矢野修一	本学経済学部助教授
富澤一弘	本学経済学部助教授
岡田和彦	本学経済学部講師
中野正裕	本学経済学部講師
安西弥生	本学経済学部非常勤講師

本論文集に掲載の論文、研究ノート（書評、講演抄録、学会記事などを除く）については、第42巻第1号から当学会において審査（レフリー）を行っています。

高崎経済大学論集

第44巻 第3号

平成13年12月

目 次

〔論 文〕

ルソー「文明論」の拠点	飯 岡 秀 夫 (1)
第一次大戦前後の日本造船業 (2)	小 池 重 喜 (27)
農村水力工場の残存と労働力需給構造の変化	
～イギリス初期綿業における労働市場構造分析～	茂 木 一 之 (49)
財政学の対象と方法	加 藤 一 郎 (69)
開発・市場移行過程における社会的学習	矢 野 修 一 (83)
星野家文書と星野長太郎 ―研究史の検討を中心にして―	富 澤 一 弘 (101)
市場移行の論理 ―ロシアの現状から―	岡 田 和 彦 (127)
信用創造と銀行準備、および金融政策	中 野 正 裕 (137)
Asians and Westerners in American and Japanese Television Commercials 1982-1998	
.....	安 西 弥 生 (151)

THE ECONOMIC JOURNAL
OF
TAKASAKI CITY UNIVERSITY OF ECONOMICS

Vol.44 No.3 December 2001

Contents

Treatise

A definite point of Rousseau's "Discussion on Civilization"	<i>Hideo IIOKA</i> (1)
On Japanese Ship-building Industry in 1914-21(2)	<i>Shigeki KOIKE</i> (27)
On the Survival of the Water Mills and the Changes of the Nabour Supply Structure in the Early England Cotton Industry	<i>Kazuyuki MOGI</i> (49)
The Domain and Methodology of Public Finance	<i>Ichiro KATO</i> (69)
Social Learning in the Process of Development and Transition	<i>Shuichi YANO</i> (83)
The Documents of the Hoshino and Hoshino Chotaro	<i>Kazuhiro TOMIZAWA</i> (101)
The Logic of the Transition to Market : The Case of Russia	<i>Kazuhiko OKADA</i> (127)
Credit Creation, Bank Reserves and Monetary Policy	<i>Masahiro NAKANO</i> (137)
Asians and Westerners in American and Japanese Television Commercials 1982-1998	<i>Yayoi ANZAI</i> (151)

ルソー「文明論」の拠点

飯 岡 秀 夫

A definite point of Rousseau's "Discussion on Civilization"

Hideo IIOKA

目 次

序. 文明批判の「神話」

I. 内観的方法 — 「確信」の根拠 —

II. 「自己」から「神」へ

III. 人間この「自由な者」 — 第三の信条 —

IV. ルソーの「生死」観 — 「魂の保存」と「神の裁き」 —

V. ルソーの「良心」論

結び. 「文明」と「良心」

※ルソーの引用文は、すべて、Oeuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard からのもので、その巻数とページ数を示した。なお、ルソーの略記は次のとおりである。

E. … Emile, ou de l'éducation, 『エミール』

B. … Lettre à Christophe Beaumont, 『ボーモンへの手紙』

S. … Discours sur les sciences et les arts, 『学問芸術論』

G. … Du contract social [1^{re} version], 『ジュネーブ草稿』

d'A. … Lettre à d'Alembert, 『ダランベールの手紙』

C. … Les confessions de J.-J. Rousseau, 『告白』

R. … Les rêveries du promeneur solitaire, 『孤独な散歩者の夢想』

D. … Rousseau juge de Jean-Jacques, Dialogues, 『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く一対話』

N. … Julie, ou la Nouvelle Héloïse, 『新エロイズ』

I. … Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes, 『人間不平等起原論』

岩, … 岩波文庫

全, … 『ルソー全集』 白水社



序. 文明批判の「神話」

ルソーの「文明論」は魂の腐敗・墮落した彼の時代に対する告発である。「私は自分の世紀にむかって苛酷な真理を述べた」(B., t. IV, P. 995, 全七, P. 525)。ルソーはこの「苛酷な真理」を拠点として、彼の時代を撃った⁽¹⁾。ルソー自身の生とルソー「文明論」の拠点をなす、この「苛酷な真理」とは何か。本稿のテーマはその追究の一点にしばられる。

ルソーの「文明論」が、究極的には、人間「倫理」——義務を生きる「有徳人」——の回復をめざしたものであることはこれからの展開が示すところである。それに関してルソーはいう。「宗教というものをいっさい忘れてしまうとやがては人間の義務を忘れることになる」(E., t. IV, P. 561, 岩中, P. 113)⁽²⁾。ルソーは「倫理」の源泉に「宗教」をみているのだ。

ここにルソーとフランス啓蒙思想家(「フィロゾーフ」)との決定的な別れがある⁽³⁾。

ルソーは「啓蒙の時代」にあって、ディドロ、ドルバックら理神論から無神論さらには唯物論への道をつき進む「啓蒙の哲学」に抗して自分自身の「神話」——文明批判の拠点となる「神話」——を構築した⁽⁴⁾。「サヴォア助任司祭の信仰告白」(以下これを「信仰告白」と略す)——いわゆるルソーの「自然宗教」——がそれである⁽⁵⁾。

ルソーが彼の時代を撃つ拠点となったかの「苛酷な真理」とは、実は、「信仰告白」に凝結したその思想に他ならない。その意味で「信仰告白」の思想は、ルソー自身の思想的拠点であると共に、ルソー「文明論」の思想的拠点でもあるのである。

さて、これからの展開が示すように、ルソーの「文明論」には三人の「人間像」が登場する。「自然人」と「社会人」と「有徳人」である。「自然人」というのは「文明以前」、「文明ゼロ」の時点で、「自然の体系」にいだかれ自然に同化して生きる「人間像」をいう⁽⁶⁾。「社会人」というのは人間の文明化の歩みのなかで魂を腐敗・墮落させて邪悪になり、「利己愛」中心に、アイデンティティを失って生きているルソーの時代の「人間像」——「ブルジョア的人間像」——をいう⁽⁷⁾。ルソーが告発しつつけたのはこの「人間像」に対してである。「有徳人」というのは人間の文明化の歩みのなかで「良心」を獲得し、自分の課せられた義務を果たして生きている「人間像」をいう。ルソーが希求したのは、この「人間像」であり、それはルソー「文明論」の拠点に立つ人間像なのである。

ここで我々が注意しなければならないのは、この三人の「人間像」は、実は、ルソーの心のなかに——ということは当然我々人間の心のなかに——住みついている「ルソー自身(我々自身)の人間像である」ということである。ということはルソーの「文明論」はルソー自身の問題であると共に、我々自身の問題でもある、ということである。ルソーについてみれば、ルソーはその生涯に於てこの三人の「人間像」を生き、そして、この三人の「人間像」のあいだを揺れ動いて自らを「有徳人」として生きることを志向して人生をおえているのである。

何故ルソー(我々)の心のなかにはこのような様々な人間像が住みつき、文明上の諸問題を現出

せしめるのであろうか。それについてはこれからの展開であきらかにされるが、それはルソー「文明論」の核になる問題である故に、結論を先どりしてその要点を示しておく必要があるであろう。

それはルソーに従えば人間が「魂」と「肉体」という二つの実体から構成されているからに他ならない。そのことによって人間は、能動的に、情念を支配して「自由である」（「有徳人」）と同時に、受動的に、情念に支配されて「奴隷でもある」（「社会人」）のだ。ルソーは自分の心の葛藤から、その三人の「人間像」は人間本性に由来することを看破したのである。そして同時代人と自分の心の葛藤の観察から三人の「人間像」をつかみとり、それをもとに「文明論」を展開しているのである。

若き日のルソーはゲーム師との出会いによって邪悪な「社会人」への堕落をまぬがれ⁽⁸⁾、レ・シャルメット体験で思想的核を形成している⁽⁹⁾。このレ・シャルメットで形成された思想的核はヴァンセンヌの森での靈感となって噴出することになる。いわゆる「ヴァンセンヌ体験」⁽¹⁰⁾がそれである。ルソーはその体験から「有徳人」への再生を志向する。

いわゆる「ヴァンセンヌ体験」がルソー思想の、従って、「ルソー文明論」の原点になっていることは疑いない。そこでこの靈感によって与えられた「無数の偉大な真理」は三つの主要な著書——第一論文（『学問・芸術論』）と第二論文（『不平等論』）と『教育論』——に散在しているとルソーはいつている。その「無数の偉大な真理」がその後のルソーの実存をかけた思索によって結晶化したものが「信仰告白」なのである。

いまここでその「無数の偉大な真理」の最も根本になる言葉を第一論文からとり出し、それを提示しよう。

「おお徳よ！ 素朴な魂の崇高な学問よ！ お前を知るには多くの苦労と道具とが必要なのだろうか。お前の原則はすべての人の心に中に刻みこまれていはいしないのか。お前の掟を学ぶには、自分自身の中にかえり、情念を静めて自己の良心の声に耳をかたむけるだけでは十分ではないのか。ここにこそ真の哲学がある。」（S., t. III, P. 30, 岩., P. 54）。

ここでルソーは「真理」についての「直覚的確信」⁽¹¹⁾をえたのである⁽¹²⁾。「徳」のなんたるかを知るためには「良心の声に耳をかたむけるだけで十分ではないか」。ルソーの文明批判の根本はこの言葉に集約されているのだ。

「ヴァンセンヌ体験」はルソーの心に「大転換」をもたらす。ルソーの「回心」・「再生」である⁽¹³⁾。ルソーは真理と自由と美德に対する情熱によってその他の世俗的な「諸情念」を支配・克服し、自ら「有徳人」として生きるべく、「自己改革」を実践しはじめる⁽¹⁴⁾。ルソーの「自己革命」は外面的なことがらにとどまらなかった⁽¹⁵⁾。さらにルソーは「自分の心を峻厳な審査にかけて、今後の内面的生活を規制し、死に臨んでもかくあれかしと思うような境地に到達したい」（R., t. I, P. 1015, 岩., P. 41）と考え、「瞑想」と「思索」とによって、その「根本原則」の探求にのり出した。「ヴァンセンヌ体験」で得たあの「直覚的確信」をベースにして「真理」の探求にのりだしたのである。

「全力をつくした探求の末に」ついにルソーは「わたしの理性が採用し、心情が確認して、すべては情念の沈黙のうちに内心の承認を得たしるしをおびている根本原則」(R., t I, P. 1018, 岩., P. 46)、「生涯にたいする確乎たる行動の基準」をつかみとる。「信仰告白」にもりこまれた思想がそれである⁽¹⁶⁾。

ルソーが生涯にわたって安住することになる「安心の基礎となる不動の原則」、「運命や人々がどうあろうとも、わたし(ルソー)を幸福にしてくれるただひとつの体系」、我々の当面の課題に即していえば、ルソーが彼の世紀になげかけた「苛酷な真理」、つまり、ルソー「文明論」の思想的拠点とはどういうものか。以下、その内容をみていくことにしよう。

I. 内観点方法 —「確信」の根拠—

序で論じたように、ルソーは「ヴァンセンヌ体験」での回心・再生から、よく生きるために必要な「自分自身のための哲学」の構築にのり出した。「安住出来る思想体系」、「自分の行動と信仰の不変の基準」。ルソーは「自己愛」とそれに通底した「人類愛」、さらに、それらに発する「真理愛」からルソー自身のための——そして「人類のための」——「神話」の構築にのり出したのである。

ルソーはみずから構築した「神話」についてボーモンに「信じ、断言し、強く確信している」(B., t. IV, P. 997, 全. 七, P. 528)と伝えている。

ルソーが彼の世紀にむかってなげかけた「苛酷な真理」とは、実は、ルソーのこの「確信」——「良心」と「理性」にもとづく、ルソーの断固とした態度決定——以外の何ものでもない。ルソー自身が「確信」し、断固態度決定しているが故に、ルソー自身の「真実」が「真理」なのだ。

ルソーのいう「苛酷な真理」の追究をめざす本稿は、それ故、ルソーが断固態度決定をする、ルソーの「確信」の根拠——ルソーはいかにして「確信」をえたのか——を問うことからはじめねばならない。

既存の宗教や教説は有神論・無神論を問わずルソーに確信の材料を提供しない⁽¹⁷⁾。それらはルソーをまどわすだけだ。それ故ルソーは自ら「確信」できる体系の自己創造にのり出す。「真理愛」を推進力として。

自己の「神話」つまり自ら「確信」できる体系を創造・構築するにあたって、ルソーが唯一「教えを乞うた」のは「内なる光」だけであった⁽¹⁸⁾。ここでルソーがいう「内なる光」⁽¹⁹⁾とは人間が生得的にもつ「自己完成能力」——感覚に出立する、「想像力」・「悟性」・「理性」——の働きと考えられる⁽²⁰⁾。

「内なる光」は思春期以降におこなわれる、「感情によって理性を完成せしめる教育」——「人類愛」や「真理愛」といったより高まった感情つまり能動的な「精神的感性」⁽²²⁾によって「感覚的理性」を高めそれを「知的理性」へと導く教育——によってますますその光を増していく。感覚の領域をこえ、神秘の領域にまで「内なる光」という「想像力」は入りこんでいく。そしてついにはその光

は、「想像力」・「悟性」・「理性」の作用としての思索のはてに、「天地宇宙」の究極にまで到達する。

「宇宙的秩序」や「神」についての「観念」を獲得するのである。

しかしルソーにあっては「思索」（「悟性」や「理性」の働き）がつかみとった「観念」がそのままルソーに「確信」を与えるわけではない。ルソーにあっては「観念」はたとえそれがどんなに正確・精密に構成されようと、そのままで「真実」→「真理」にならないのだ。

何故ルソーにあって「観念」がそのまま「確信」（「真実」→「真理」）にならないのか。

我々はここでルソーが「神話」構築にあたって採用した「内観的方法」に遭遇することになる。ルソーが自らの真実→真理を確信するためには「思索」に加えるにさらに「瞑想」——「心情」の同意——を必要としたのだ⁽²³⁾。

この「思索」に加える、「瞑想」——「心情」の同意——が必要であるという方法の採用は、ルソーの生涯をつらぬく⁽²⁴⁾ 次のごとき確信にもとづいている。

「わたしたちにとっては、存在するとは感じることだ。わたしたちの感性は、疑いもなく、知性よりも先に存在するのであって、わたしたちは観念よりも先に感情をもったのだ。」
(E., t. IV, P. 600, 岩・中, P. 17)。

「存在するとは感じることだ」、別言すれば、「我感ずる、故に、我あり」。これがルソーの確信するところである。そこにルソーの確信の根拠——直覚的明証性——がある。ルソーはこの確信の根拠、直覚的明証性のもとに、「判断すること」（理性の働き）と「感じること」（感情の作用）を区別し、「理性よりも感情」を優先させ、究極の「確信」の根拠を「感情」に求めたのである。

「瞑想」という方法は情念を沈黙させ、無意識にねむる「深層心理」にまで至り、心のおくそのものを掘りおこすことによって、「感情」を高めると共に、「感情」を明徹にとぎ澄まし、もって人間をして直覚的明証性のもとに「確信」することを可能ならしめるものなのである。

こうしてルソーにあって「確信」は「理性」（「思索」）と「感情」（「瞑想」）との協働によって与えられることになる。「感覚」が直接に与える対象や、「理性」が媒介的に与える観念（体系）を「感情」が直覚的明証性のなかで承認した時、その時はじめてルソーの心のなかで「内面的な確信」が生ずるのである。

これからみていくルソーの「神話」はこうして獲得されたルソーの確信のひとつひとつの積み重ね——「わたしの理性が採用し、心情が確認して、すべては情念の沈黙のうちに内心の承認を得たしるしをおびている根本原則」(R., t I, P. 1018, 岩・., P. 46)——の上に構築されているのである。

Ⅱ. 「自己」から「神」へ

「わたしは何者なのか」。「わたしという存在の原因は何であり、義務の規則は何であるのか」。ルソーはこの問に対する「確信」できる回答を自らの手で獲得するために、まず、「確信」の根拠を

「確信」する。「我感ずる、故に、我あり」。この「自己存在」の「確信」こそ、ルソーの「確信」の根拠——ルソーが直覚的明証性をもって確信する根本の真理——である。

「わたしは存在する。そして感官をもち、感官を通して印象をうける。これがわたしの感じる第一の真実であって、わたしはそれを承認しないわけにはいかない」(E., tIV, P. 570, 岩・中, P. 129)。

ルソーはこの「自己存在」の確信を原点として、そこから、「内なる光」という有限でちっぽけな人間能力を唯一頼りにして、「神とその英知」の「存在確信」にむかって一人旅立つ。

以下、「自己」から「神」へ至る、神とその英知の「存在確信」の過程を4点にまとめて示すことにしよう⁽²⁵⁾。

1. 「自己の存在」とは区別された、「天地宇宙の存在」の「確信」。⇒ルソーはまず、「感覚」は自分のうちにおこり、それは自分の存在を感じさせるが、「感覚」の原因つまり「感覚」の対象は自分の外にあり、自分とは同じものではない、ということを「確信」する。

「そこで、わたしのうちにある感覚とわたしの外にあるその原因、つまり対象、とは同じものではないということがはっきりとわたしにわかる。そこで、ただわたしが存在するだけではなく、ほかの存在、つまりわたしの感覚の対象、も存在することになる」(E., tIV, P. 571, 岩・中, P. 129)。

こうしてルソーは「自己存在」の「確信」から発して、「自己存在」と並ぶ、自己と区別された「感覚」の対象たる「物質」⁽²⁶⁾ (あるいは「物体」)⁽²⁷⁾——「天地宇宙」⁽²⁷⁾——の存在を「確信」するのである⁽²⁸⁾。

2. 「自発的・意志的運動」が存在することの「確信」。⇒次いでルソーは「感覚」の対象たる「天地宇宙」に目を移し、それについて考察を始める。するとルソーは考察しようとする、「能動的力」(「比較し判断する力」)が自分にそなわっている⁽²⁹⁾ ことを知る。そういう「能動的な力」としての思索は次のことを判断する。「天地宇宙」は静止を含めて運動しており、その運動には二つの種類がある。一方における受動的な「ほかから伝えられる運動」と他方における能動的な「自発的あるいは意志的な運動」⁽³⁰⁾ の二種類である。「前者では動因は動かされる物体の外にあるが、後者では物質そのもののうちにある」(E., tIV, P. 574, 岩・中, P. 133~4)。

では「物質そのもののうちにある」能動的運動の「動因」をどうやって知ることができるのか⁽³¹⁾。「自発的な運動」が存在することの「確信」について、ルソーは次のようにこたえている。

「あなたがさらに、ではどうしてわたしは自発的な運動が存在することを知っているのか、とたずねるとしたら、わたしはそれを感じているから知っているのだと答えよう」(E., tIV, P. 574, 岩・中, P. 134)。

ルソーは「自発的な運動」の存在を自分の「内感」によって感じとりその存在を「確信」してい

るのである。このルソーの「内感」にもとづく「内面的確信」こそ、次にのべるように、「天地宇宙の運動」の外部的な究極の原因、究極の意志の存在を感じとらせ、ルソーをしてそのことを「確信」せしめるものなのである。

3. 「天地宇宙を動かす意志（＝神）の存在」の「確信」：「第一の教理」⇒「天地宇宙」は運動している。しかしそれは「ほかから伝えられる運動」の連動である。物質界は運動をうけとり連動しているが運動そのものを生み出すことはない⁽³²⁾。この観察による事実からルソーは次のように推論する。

「たがいにはたらきかけている自然の力の作用と反作用を観察すればするほど、ますますわたしは、ある結果から別の結果へとさかのぼって行って、いつもなんらかの意志を最初の原因としなければならないことを知る」（E., t. IV, P. 576, 岩・中, P. 136）。

この推論（「思索」による結論）は2. でのべたかの「内面的確信」——「自発的な運動」が存在することの「確信」——によって承認される⁽³³⁾。

かくしてルソーは第一の教理（第一の信条）——「確信」にもとづく「真理」——をうる。

「なんらかの意志が宇宙を動かし、自然に生命をあたえているものと信じる。これがわたしの第一の教理、つまり、わたしの第一の信条だ」（E., t. IV, P. 576, 岩・中, P. 136）。

この「天地宇宙」を動かす究極の意志が存在することの「確信」は究極の「能動的な存在者」の「存在確信」につらなる。ルソーはいう。「宇宙を動かし、万物に秩序を与えている存在者、この存在者をわたしは神と呼ぶ」と。

4. 「神の英知」の「確信」：「第二の信条」⇒何故「天地宇宙」は存在するのか、「天地宇宙」の目的は何か、それについては知りえない。しかし、「天地宇宙」を構成しているそれぞれの存在が、互に助けあっている内密の対応関係はみとめることができる。「天地宇宙」はちょうど時計のようなものだ。それを構成しているそれぞれの存在（歯車）が「共同の目的のために歩調をそろえて」協働・協力している。「天地宇宙」は規則正しい、一様な、変わることのない法則に支配されて運動している。「天地宇宙」に秩序をあたえている「英知」を考えないでいることができるだろうか。

ルソーは自分自身のうちだけでなく森羅万象、山川草木、花鳥風月のなかに、神の「英知」を感じとり、それを確信している⁽³⁴⁾。

かくて「第二の信条」（「確信」にもとづく「真理」）が示される。

「動く物質はある意志をわたしに示してくれるのだが、一定の法則に従って動く物質はある英知をわたしに示してくれる。これがわたしの第二の信条だ。」（E., t. IV, P. 578, 岩・中, P. 139）。

こうしてルソーは思索——「想像力」による推論——と「感情」の協働から、「神」の存在と「その英知」を「確信」し⁽³⁵⁾、ルソー「神話」の基礎をすえる。第三の信条⁽³⁶⁾については項を変え

て論ずることにしよう。

Ⅲ. 人間この「自由な者」 — 第三の信条 —

ルソーは、Ⅱでのべたように、「自分自身の内部」や天地宇宙のいたるところに、「神を感じ」⁽³⁷⁾、その「内的感情」にささえられて、「神」という名称に英知と力と意志と善性の観念を結びつける⁽³⁸⁾。そしてあらゆる善性の源泉にして全知・全能の神によって、自分（人間）は「天地宇宙」のなかで「第一の地位」を与えられていることを見出す。

何故人間は「天地宇宙」のなかで「第一位の位置」を占めているといえるのか。

何故ならひとり人間のみが「意志」と「意志を実行するためにもちいることのできる道具」とをもつことによって「自分の周囲にあるすべてのものに働きかけることができる」からである、また、「知性」をもつことによってあらゆるものを調べてみることができるからである。さらにいえば、「秩序、美、徳」を感じることができ、善をおこなうことができるからなのだ。

以上を要約して一言でいえば、ひとり人間のみが「自由な者」として「神」——非物質的な実態——によって「生命」を与えられているからだ。これがルソーの「第三の信条」の核心をなす。

我々はルソーの「第三の信条」をさらに理解するためには、ルソーの「自由」の意味を知らなければならない。ルソーにあって「自由」とはいったい何を意味しているのであろうかと問うことによって。

以下ルソーの「自由」論を論ずることにしよう。

ルソーの「自由」論の根底にはルソーの自己観察をつうじての「人間」観が息づいている。ルソーは人間的生命——人間的本性——に、相互に相反する、二つの根源的なもの（実体）が存在することをみている。一方は能動的な「魂」的生命——「意志」や「理性」——であり、他方は受動的な「肉体的」生命——「感情」や「情念」——である⁽³⁹⁾。人間は肉体と魂という二つの実体から構成されているとルソーはみているのである。

「肉体」と「魂」という二つの実体の相剋により、「社会人」と「有徳人」の間を揺れ動く、ルソー（人間）の心の叫びをきこう。

「この二つの相反する衝動によってひきずられ、悩まされて自分を知って、わたしはこんなことをつぶやいていた。そうだ、人間は一つのものではない。わたしはあることを願いながらも願ってはいない。わたしは自分が同時に奴隷でもあり、自由でもあると感じている。わたしはよいことを知っているし、それを好んでもいる。しかもわたしは、悪いことをしている。わたしは理性に耳をかたむけているときは能動的だが、情念にひきずられているときは受動的だ。そして、わたしが屈服するとき、なによりも耐えがたい苦しみは、自分は抵抗することもできたのだ、と感じていることだ。」(E., t. IV, P. 583, 岩, 中, P. 147)。

上の引用文からごくおおざっぱに結論をいえば、ルソーにあって「自由」とは「自分自身の支配

者」になるということである。つまり相反する二つの実体の相剋のなかにあつて、「能動的な魂」（良心と理性）によって「受動的な肉体」（情念）を支配している時、その人（「有徳人」）は「自由」であり、その反対に「情念」にひきづられている時、その人（「社会人」）は「不自由」である、ということになる。

しかし、ルソーにおける「自由」についての議論は、このままでは全く不十分である。以下ルソーの三つの言葉を検討することによって、ルソーのいう「自由」の意味をほり下げることにしよう。

まず「自由」とその危険について言及する、ルソーの次の言葉を紹介しよう。

「感じたり感じなかったりすることはわたしの自由にはならないが、わたしの感じていることをよく検討したりしなかったりするのはわたしの自由だ。……………ただわたしは、真理は事物のうちにあるのであつて、それを判断するわたしの精神のうちにあるのではないということ、そして、わたしが事物についてくだす判断に自分のものをもちこむことが少なければ少ないほどいっそう確実に真理に接近することができるということを知っている」（E., t. IV, P. 573, 岩. 中, P. 132）。

「事物」→「感覚」→「感情」の流れは人間の自由にはならない。それだけに「事物」のうちにある「真理」はストレートに「感情」によって感じられる。そこには誤りが無い⁽⁴⁰⁾。他方「事物」や「感覚」や「感情」を判断し、検討すること（悟性や理性の働き）は人間の自由である。しかし人間の「自由」は誤りを生む。それが「自由」の濫用・誤用・悪用につらなる。ここでルソーは人間の「自由」を知的能力（悟性や理性）にもとめているのであるが、その「自由」は⁽⁴¹⁾誤謬につらなるという危険をみているのである。

次に、上の言葉に呼応して、「自由」のなんたるかを端的に示す言葉を紹介しよう。

「たしかに、わたしにとってよいことを望まないでいることはわたしの自由にはできない。わたしにとって悪いことを望むことはわたしの自由にはできない。しかし、わたしに適したこと、あるいはそう考えられることのほかには望むことができないということ、わたしの外にあるなにものによっても決定されないでそうすること、まさにそういうところにわたしの自由があるのだ」（E., t. IV, P. 586, 岩. 中, P. 151）。

わたしの心の働き（「よいことを望まないでいること」あるいはまた「悪いことを望むこと」）は外部的な要因によって与えられ、自分の自由にはならない。しかし人間はその外にあるなにものによっても決定（「意志決定」→行為）されないで、自分の内なる原因、自分の内部にある力（知的能力）によって決定（「意思決定」→行為）することができる。そこに「自由」があるというのである。

最後に上の二つの言葉を統合する、ルソーの「自由」についての決定的な言葉を紹介しよう。

「わたしが意志というものを知っているのは、自分の意志を感じているからにはかならない。それに、悟性というものも、もっとよくわたしに知られているわけではない。どんな原因がわたしの意志を決定するのか、ときかれば、わたしは、どんな原因がわたしの判断を決定

するのか、と反問しよう。この二つの原因は一つのものにすぎないことは明らかなのだ。そして、人間がその判断において能動的であること、人間の悟性とは比較したり判断したりする力にほかならないことをよく理解すれば、人間の自由とはそれと同じような力にほかならないことが、あるいはそこから派生していることがわかるだろう。人間は真実を判断したときによいことを選び、判断を誤れば選択を誤るのだ」(E., t. IV, P. 586, 岩. 中, P. 150)。

ここでルソーが「自由」について論じていることは次の4つの論点に要約ができる。1. 「意志」と「悟性」という二つの原因は「一つのもの」である。2. 人間の「自由」とは人間の「選択する」能力である「意志」とその原因となる「悟性」(「判断力」という「力」(「能力」)である⁽¹²⁾。3. あるいはそこから派生したものである。4. 人間は「真実」を判断した時は「よい意志決定」をし——「よいことを選び」——、判断を誤れば「誤った意志決定」をする——選択を誤る——。

以上4つの論点のなかで、ルソーが「自由」についてのべている肝心要はいうまでもなく、論点2である。ルソーにあって「自由」とは「選択する」能力である「意志」とその原因となる「悟性」という、人間内部の、「能動的力」を意味しているのである⁽¹³⁾。

それでは「自由」という「能動的力」である、「悟性」と「意志」との関係はどうなっているのか。ルソーはつづけていう。

「そこで、人間の意志を決定する原因はなにか。それはかれの判断だ。では、判断を決定する原因はなにか。それはかれの知的能力だ、判断する力だ。決定する原因は人間自身のうちにある」(E., t. IV, P. 586, 岩. 中, P. 150~1)。

ルソーはここで、(意志→) 知的能力=判断する力→判断→意志(選択)→行動という図式を考えている。そして結論づける。決定する原因つまり「自由」は人間自身のうちにあると。そしてあらゆる行動の根源は自由な存在者の意志にあるが、逆に自由がなければ本当の意志はないと。

こうしてルソーは人間の「自由」についての長い思索の後に、ついに、第三の信条にたどりつく。

「人間はだからその行動において自由なのであって、自由な者として、非物質的な実体によって生命をあたえられている。これがわたしの第三の信条だ」(E., t. IV, P. 586, 岩. 中, P. 151)。

ここでルソーは、人間は「自由な者」として非物質的な実体によって魂=精神生命を与えられていると述べているのである。ルソーは自分自身のうちに肉体的生命と区別された自分の魂を感じ、「自由な者」としてこの「第三の信条」を確信しているのである。その意味でこの「第三の信条」もまたルソーの「確信」に支えられた真理なのだ⁽¹⁴⁾。

この人間に与えられた魂=精神的生命は肉体的生命が亡んだあとも生き残る、というよりは、肉体的束縛から解放されてさらに自由になる、とルソーによって「確信」されている。「第三の信条」はルソーの「魂の保存」の思想につながるのである。

ルソーの「生死」観とそれを根底から支えるルソーの「魂の保存」の思想については、項をあら

ためて論ずることにする。

IV. ルソーの「生死」観 —「魂の保存」と「神の裁き」—

「外部の力」によって決定されて動くところに「不自由」があり、「内部の力」によって決定し行為するところに「自由」がある。この「自由」という「内部の力」にルソーは「非物質的実体」によって分与された「魂」をみとめ、次のことを「確信」するに至る。「魂は非物質的なものであるから、それは肉体が滅びたあとにも生き残る」、「肉体と魂の結合が破れるとき、肉体は分解し、魂は保存される」(E., t. IV, P. 589, 岩・中, P. 156～7) と。それだけではない。ルソーはさらに人間は生きているあいだは半分しか生きていない、魂の生活の全面的回復は肉体の死をまっぴらしてはじめて始まる、というのを「確信」しているのである⁽⁴⁵⁾。

ルソーの「生死」観はルソーの以上ごとき「魂の保存」の「確信」によって支えられている。

ルソーの「生死」観で、特に我々の注目をひくのは、ルソーの「現世否定」的とも称すべき思想である。ルソーの生涯をみると、ルソーは人生のある時期——レ・シャルメットに於る「若きルソーの挫折」——に「人生の目的をこの世に求めてはならないと悟り」、「愛着をこの世からひきはなす方向」にむかっており、この世には大きな価値はない、と「確信」し、「現世の幸福」は自分にとって決して「大きな価値があるとは思わない」といい切っている。

ルソーのこの「現世否定」的とも称すべき思想は現世に価値をおき、「現世の幸福」—諸欲求の満足—を追究する現世中心的な啓蒙思想にあって異彩をはなっている。しかしそこにこそルソー思想のベースがあり、ルソー思想の特色があるのである。

「現世での幸福」—諸情念の満足—は真の幸福ではない、だから、それを人生の目的にしてはならないという思想から、エミールの先生は「家庭生活」での幸福という正に「現世での幸福」の絶頂に達しようとしているエミールに対し、次のようにいう。

「死すべき存在、滅び去る存在であるわたしは、すべてが変わっていき、過ぎ去っていくこの地上であって、自分もそこからあしたにも消えていくこの地上であって、永遠の絆をつくりあげようなどと考えるべきだろうか。……………幸福にとらえられることなく、幸福をとらえることになり、なにものもとどめておくことのできない人間は、失うことを知っているものを楽しめるだけだということを知ることになる。……………人をだますいろいろな億見を克服したきみは、さらに、この世に大きな価値をあたえている臆見を克服することになる。きみは安らかに人生をすごし、恐れることなく人生を終えることになる。どんなことにも執着しないように、人生にも執着しないことになる。ほかの連中が、恐怖にとらえられ、この世を去ることによって存在しなくなるのだと考えるとき、この世のむなしさを知っているきみは、これから生きはじめるのだと考えるだろう。死は悪人の生の終わりだが、正しい人の生の始まりなのだ」(E., t. IV, P. 820, 岩・下, P. 201～2)。

この世での幸福は永遠につづくようにみえる時があったとしてもそれは幻想にすぎない。何故ならこの世はすべてが変わっていき、過ぎ去っていき、むなしいものであるからだ。だから人生に執

着しないように、どんなことにも執着しないように。「この世に大きな価値をあたえている臆見を克服する」ことが大切だ。

現世での幸福—諸欲求諸情念の満足—追及をいましめ、「死後の世界の幸福」を現世で生きることがすすめているルソーのこの思想はダンマの顕現による「煩悩」からの解放に安心を見い出す仏教思想にかぎりなく接近している⁽¹⁶⁾。

さらに、死は「悪人」——ここで「悪人」とは社会生活のなかで「利己心」中心に生きて邪悪になったブルジョア的現世中心主義者と考えてよい——にとって「生の終り」だが、「正しい人」——「有徳人」——にとっては「生の始まり」なのだとするルソーのこの「生死」観は『新エロイズ』に於るジュリの次の言葉に連動している。

「けれども、実を申せば、わたくしは、嘗て地上に住んでいた肉体から自由になった靈魂が再び地上に戻ってきて、さまよい、恐らく嘗て愛しく思った人のまわりに留まるということがあり得ると推定することに不合理なところがあるとは思わないのです」(N., t. II, P. 728, 岩, 四, P. 250)。

ルソーが求めてやまない「心と心の融和」、「魂と魂の交感」は現世を生きる人間同志だけのあいだにかぎらないのだ。それ故、ルソーは死を恐れない。

「あなたは死ぬのを喜んでいる」とジュリにむかって叫ぶヴォルマール——ジュリの夫——の言葉は、実は、ルソー自身の心の叫びでもあったのだ。自分も死を待ち望んでいると⁽¹⁷⁾。

ルソーの「生死」観で次に我々の注目をひくのは神の「神議論」にからむ、死後の世界に於る「裁き」の問題である⁽¹⁸⁾。以下その論旨を要約しておく。

神は「善性」の源である。それ故「万物をつくる者の手をはなれるときはすべてよいものである」。以上はルソーの「確信」する真理である。しかし「人間の手にうつるとすべてが悪くなる」⁽¹⁹⁾。悪や不正はすべて「人間の手」つまり「人為・文明」に由来する⁽⁵⁰⁾。これもまたルソーが「確信」する真理である。ルソーの「神義論」は以上のルソーの「確信」によって支えられている。

人は「善の観念」を神から与えられ、魂のうちにしるされている「正しくあれ、そうればお前は幸福になれる」ということばを信じて生きている。それが「有徳人」だ。それなのに何故悪が生れるのか。「人の手」(「人為・文明」)のおかげである。それではそれは何故悪を生むのか。

それは多くのブルジョア的人間が「自由」という能力(内なる能動的力)——その発揮が人為・文明である——を濫用・誤用・悪用しているからである⁽⁵¹⁾。(だから人間がいまわしい進歩をやめれば、「人為・文明」をすてればなにもかもよくなるのだ⁽⁵²⁾。)

こうしてルソーは悪のすべてを「人の手」に由来するとして神の「善」、神の「正義」を弁論する⁽⁵³⁾。

しかし、ここに、「現世」に於る「『善人』の滅び『悪人』の栄え」の問題が残される。「現世」にあっては「美德」が亡び「惡徳」が栄えている、「良心」に従って正しく生きている人はいつも迫害され、悪人は栄えている。